

「みち」

令和3年7月19日 発行

教 え !!

輝く まなざし！

一学期、コロナ禍の中、各校とも学習活動や行事等にご苦労なされたことと思います。

そのような中、内堀タケシ氏をお迎えしていくつかの学校で取り組まれた Photo ディスカッション。子どもたちの様子から改めて「学ぶ」ということに喜びを感じている姿を見ることができました。今回はその一端をお伝えいたします。



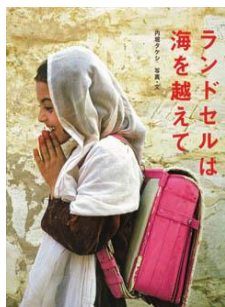
【人にかけるもの】
時間をかける
いい言葉をかける
期待をかける
負荷をかける

【人に与えるもの】
環境を与える
責任を与える
夢を与える
愛情を与える

花巻東高校・野球部
佐々木洋監督はいつもこんな言葉を心にとどめて生徒にかかわっているのだということです。
メジャーリーグの大谷選手もこんな中で育ったのですね。



ここは学校。
アフガニスタンでは、整備された学校があるとは限らない。
教科書もノートもない。
校舎もない。
小さな黒板だけが、学校のしるし。
それでも、みんな勉強が大好きだ。
字が読めるようになり、書けるようになり、
新しいことをたくさん知る。
みんな、すごい集中力。
先生のことばを聞きたいと、じっと前を見ている。
授業中は、先生の質問にいっせいに手をあげ、真剣に答える。
きみたちが贈ったじょうぶなランドセルは、
カバンとしてはもちろん、机の代わりに使われている。



ランドセルは海を越えて



アフガニスタンの学校

▲ 写真絵本「ランドセルは海を越えて」より抜粋

今、4年国語の教材文、写真絵本『ランドセルは海を越えて』の著者であり写真家の内堀タケシさんが、市内の小学校で Photo ディスカッションを開いてくれています。教育委員会では、その時間に合わせて可能な限り同席させていただいていますが、いつ、どの学校のどの時間でも写真を食べるように見詰め、内堀さんの語りのひと言ひと言に耳を傾ける子どもの様子に圧倒されています。

一言で言うなら、空気が変わるのです。子どもの目がまるで写真に吸い込まれるような感覚。そして内堀さんの声が子どもの心に染み入るように届いているのがわかるのです。

基本、クラス単位で行う Photo ディスカッション。中には困難や課題を多く抱えている子どももいるはずなのですが、どうでしょう。そんなことは微塵も感じさせない雰囲気の中で時間は過ぎていきます。例えば、ある学校で、普段の授業では明らかに遅れがちなひろし君（仮名）が、先生の「感想やしてみたいことを書いてみよう」の投げかけに対し、「待ってました」と言わんばかりに鉛筆をすらすらと走らせ始めたのです。書きあがった感想が裏面。どうですか？

内堀さんが子どもと過ごす様子を見て改めて子どもの様子から学んだり考えさせられたりしたことがあります。

例えば・・・子どもは一人残らず学びたがっている存在で、「やってみたい、調べてみたい」という気持ちを上手に引き出してあげると目を輝かせて学ぶものなのだということ。

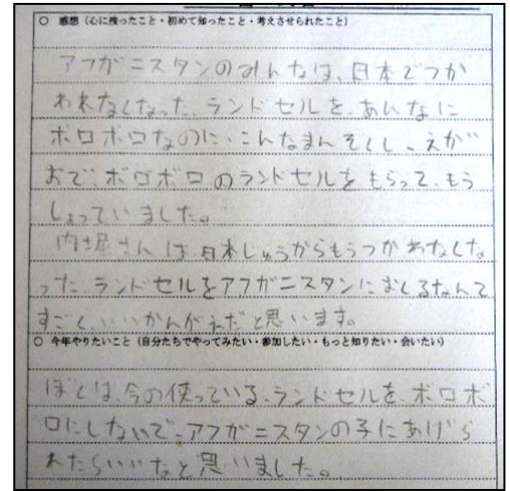
教師が、どこかでその子が抱えている困難や課題のせいにしてたり、その子の家庭の環境のせいにしてし
(裏へ続く⇒)

まったりして、結果その子を置いてきぼりにしてしまいがちなことはよくあることですが、それでは駄目。結局は子どもの学ぶ権利を保障してあげていないことになってしまうからです。

もう一つ。国語の教材文とはいえ、道徳にも総合的な学習の時間にも発展させることができる学びの要素が多いこの単元において、授業を進めるにあたっては指導者の「単元構想力」や「単元展開力」がすごく問われるということ。


きっかけは内堀さんとの出会いでも、授業実践者は教師自身。子どもが集中し参加する姿を見ることができたからこそ、「広く視野を広げ、自分を見つめ直す」「人の幸せを自分の幸せとして感じることができる」「自ら課題をとらえ、解決する方法を考え、意欲的に取り組む」「学びの場を、学校から学校の外へ広げる。学ぶことから行動へつなげる」などとさらに目的や価値を見つめ直し、その後の授業を進めていくことで子どもの学びはさらに広がりと深まりを持ちます。これが、本来の“教科をまたぐ横断的な学習”“総合的な学習の時間”のあり方だと確信しています。

そして最後に、子どもは日々の小さなできごとの中で成長しているわけですが、子どもの成長を大きく促すきっかけは、今回の内堀さんとの出会いのような非日常的なできごとであるということ。このことを踏まえると、教師が子どもにどう育ってほしいか夢を描き、授業を実践することってやっぱり大切です。



▲ ひろしくん(仮名)の記録

「次もがんばって！」
は頑張れる？



児童生徒を称賛するとき「できたね！すごいよ。次もがんばってね。」という言葉投げかけてしまうことがあると思いますが、「次もがんばってね。」は余計な一言かも？という雑誌の記事を目にしました。生徒を励ますつもりでかけた言葉が、やる気を削いでしまうことがあることを考えさせられました。

心理学者のセリグマン氏が、「学習性無気力感」についての実験から、人間にも同様の現象がみられることを報告しています。大学生にもともと解決不可能な問題を実施させたのちに解決可能な問題を提示しても、無気力感に陥り、成績が下がったというのです。やってもやってもできないことが続くことであってもやる気が失せてしまうというのです。

これを、学校生活の学習に置き換えると、一つの課題が終了したときに、「よくできたね！じゃあ、次もがんばろう！」は「できた！」と思った瞬間に「次」を提示され、再び努力を強いられる言葉に変わってしまうということです。努力が認められなかったことに等しくなってしまうと言えます。

子どもたちが達成感を得た時には「がんばったね！うれしいね！」と気持ちに寄り添う、これだけでよいのです。こちらが「次」のことを話さなくても、達成感を得ていれば、子どもたちは自発的に次の問題に取り掛かってくれます。

*「学習性無気力感」：ハンモックにくるまれ、逃げられない状態にされたイヌに電気ショックを与え続けると、逃げられるシチュエーションになったときでもじっとうずくまって、電気ショックが終わるのを待つだけ。逃げようとしな。という内容で、回避、逃避の不可能な状況で苦痛を与え続けることによって自分にはどうすることもできない(自分が無力である)ことを学んでしまい、できることもできなくなってしまうと考えられている。

(参考資料) 週刊教育資料 2021年7月5日号

『私たち、子どもの全力サポーター 「努力」と「無気力」は背中合わせ 大橋すみれ』より

21日からは夏休みに入ります。夏休みは心身ともにリフレッシュし、2学期さわやかに迎えますようお過ごしください。